

交流会

プログラムの最後に行われた交流会では参加者同士、一日を振り返ってお互いの健闘を称えたり、いろいろな国の留学生との交流を深めていました。参加者からは「国によって環境に対する意識が随分違うと思った」(留学生)、「普段過ごしている街中をいつもと違う視点で見ることができてよい経験になった」(日本人学生)など感想が寄せられました。ちなみに、この日の食事は環境に配慮し、道産品を使用した内容で参加者も全員MY箸・MYコップを持参。最後まで気を抜かず環境の大切さについて考えた一日となりました。



1日のプログラムを終えての交流会の一こま

地域との交流 札幌国際センター・帯広国際センター

JICA札幌「見聞広場」大盛況のうちに終わる

今年の見聞広場は、平成19年9月1日(土)、札幌国際センターの中庭で、寛克彦JICA札幌所長の挨拶でスタートした。

ブリーフィング室では、アジア、ラテンアメリカ、アフリカの順に各国チームが30分交代で自国の踊りや歌を披露し、大勢の観客で会場は埋め尽くされた。また、「世界の料理をたべよう」コーナーでは、サテ(アジア)、パステル(ラテンアメリカ)、ウガリ(アフリカ)を来場者に無料で提供し、約300人の方々に楽しんでいただいた。その他、だんらんコーナー・衣装展示コーナー・帰国専門家会ブースも今年新たに加わり、より充実した内容になった。異文化紹介コーナーでは、それぞれの国の研修員が自慢の展示品を披露し、ロビーに掲げられた研修員の出身国の国旗は来場者や研修員の視線を釘付けにしていた。

研修員を含め、全体で約350人と去年の倍以上の参加者となった今年の「見聞広場」は、最後に中庭で「We are the world」、「上を向いて歩こう」を参加者全員で合唱し大盛況に終わった。



スケート初体験

秋の深まりを感じるようになった10月7日、帯広国際センターでは早くも、研修員のためのスケート体験が行われた。日曜の朝、帯広の森アイスアリーナには26名のJICA研修員、留学生、市民ボランティアと、帯広市の森の交流館館長以下スタッフ、そして若い助っ人としてアイスホッケー部で活躍する中学生など総勢50名が集合した。参加した研修員は、セルビア、ボスニア、ウクライナといった“滑りそうな”国の何人かを除いて、中南米組やアフリカのモロッコ、マラウイ、南太平洋のパプアニューギニアなど“暖かい”国の出身者がほとんどで、立つのがやっとという人も多かった。

中学生等ボランティアがマンツーマンで滑り方を指導した結果、終盤には一人で滑れるようになった研修員もいた。ボランティアが用意した椅子を押しながら滑っていた初心者の研修員には椅子の利用は「グッド・アイディア!」と評判が良かった。冷たい氷の上で、滑れる人も滑れない人も笑いながら楽しんでいた。

プロテクターとヘルメットに身を固めてスケートに挑戦

